

## 1 1 . 位相空間と Liouville の定理

統計力学では、視点を系の構成粒子（原子、分子）のレベルに移して議論を行う。このとき導入するのが位相空間の概念である。さしあたり量子力学は考慮せず、古典力学の範囲で議論する。

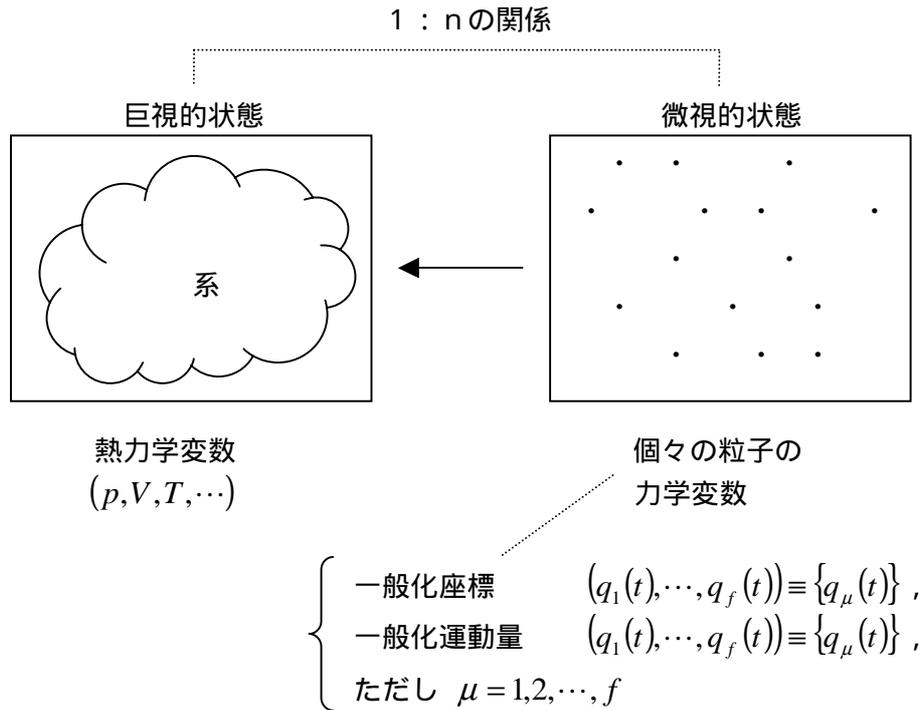


図 11 - 1 . 巨視的状態と微視的状態の関係 ( 1 )

ここで  $f$  は粒子の自由度（一般化座標の数）を表す。たとえば 3 次元  $N$  粒子系の場合、 $f = 3N$  となる。巨視的状態（熱力学的状態）は熱力学変数  $p, V, T, \dots$  で指定され、微視的状態は粒子の力学変数  $\{q_\mu\}, \{p_\mu\}$  で指定される。個々の粒子のミクロナ動きの集積は、熱力学的状態に対する「統計集団」の概念を生み出す。

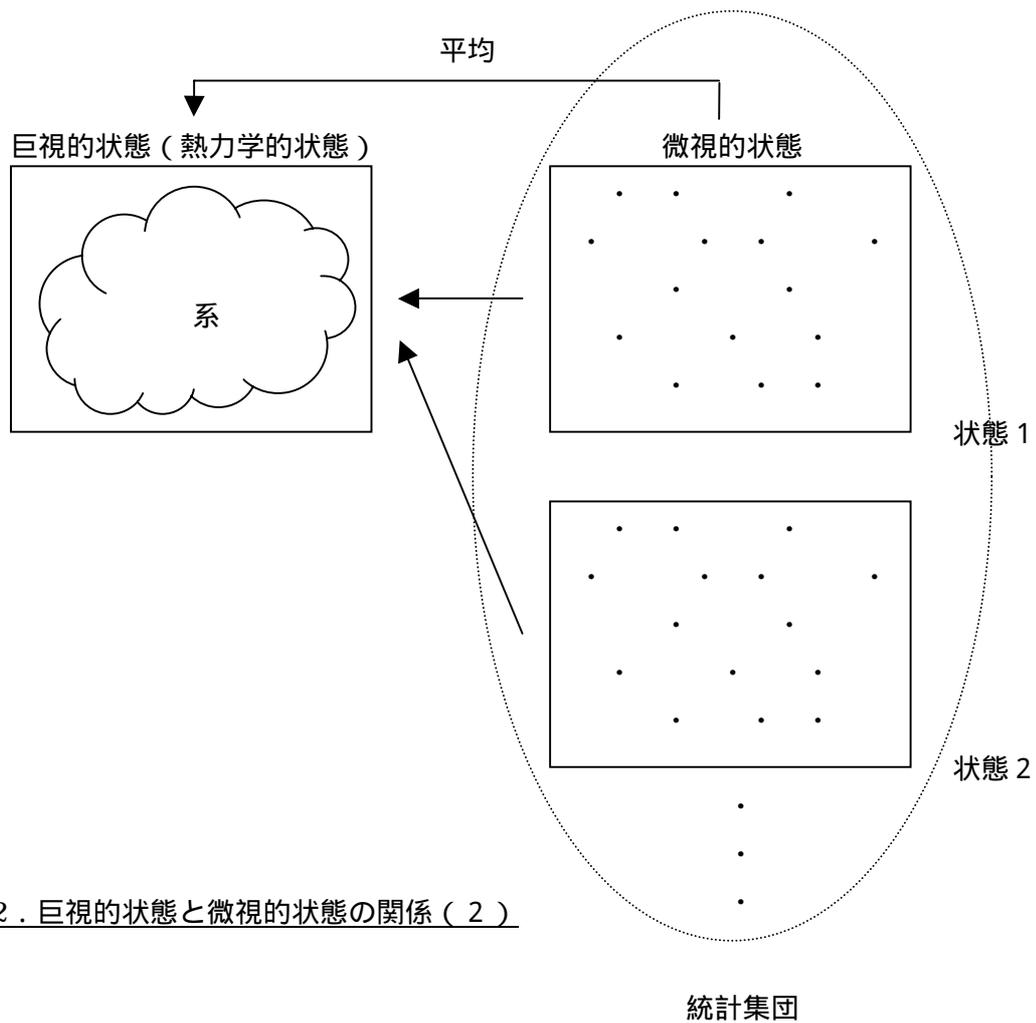


図 11 - 2 . 巨視的状態と微視的状態の関係 ( 2 )

微視的状態の時間変化

個々の粒子の運動状態は Hamilton の正準方程式で記述する。

$$\dot{q}_\mu = \frac{\partial H}{\partial p_\mu} \quad , \quad \dot{p}_\mu = -\frac{\partial H}{\partial q_\mu} \quad ( \mu = 1, 2, \dots, f ) \quad ,$$

ただし  $H = H(\{q_\mu\}, \{p_\mu\}, t)$  ..... ( 11 - 1 )

正準方程式は、 $2f$  個の連立微分方程式として表される。また時間  $t$  を媒介変数として、解を  $(\{q_\mu(t)\}, \{p_\mu(t)\})$  と表したとき、それは  $2f$  次元空間 ( 位相空間 ) の中で曲線 ( 位相軌道 ) を描く。位相軌道上の点 ( 代表点 ) は、系の微視的状態を完全に指定する。なお運動量を考えない  $f$  次元空間  $(q_1, \dots, q_f)$  を、とくに配位空間とよぶ。

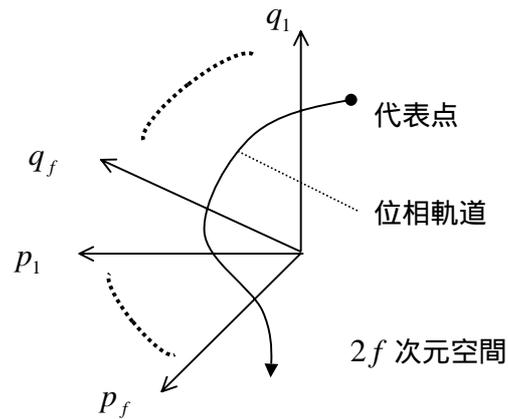


図 11 - 3 . 位相空間

### 位相空間の性質

位相空間の性質を以下に列挙する。

- ・ 位相空間の 1 点を指定すると系の状態は完全に指定され、過去および未来の状態は完全に決まる。
- ・ 位相軌道は交差しない。(もし交差すると仮定すれば、交点の未来が 2 つあることになり、矛盾する。)

(例) 1次元調和振動子

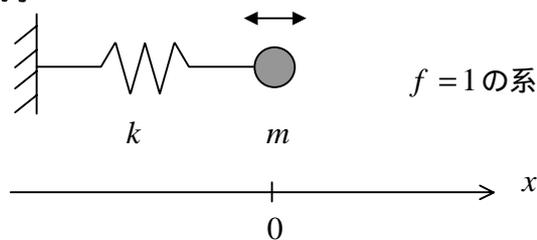


図 11 - 4 . 1次元調和振動子

バネ定数  $k$  のバネの先端に質点 (質量  $m$ ) を取り付けた、1次元方向に振動する系を考える。この系 (1次元1粒子系) の自由度  $f$  は

$$f = 1$$

である。またハミルトニアン  $H$  は

$$H = \frac{p^2}{2m} + \frac{1}{2}kx^2 = Const. \quad , \quad \text{ただし } p = m\dot{x}$$

となる。よって正準方程式は

$$\dot{x} = \frac{\partial H}{\partial p} = \frac{p}{m} \quad \dots \quad , \quad \dot{p} = -\frac{\partial H}{\partial x} = -kx \quad \dots$$

, を解いて

$$\left. \begin{aligned} x(t) &= A \sin\left(t\sqrt{\frac{k}{m}} + \alpha\right) \quad , \\ p(t) &= \sqrt{km}A \cos\left(t\sqrt{\frac{k}{m}} + \alpha\right) \quad , \end{aligned} \right\}$$

ただし  $A, \alpha$  は任意定数

を得る。式のような表現の仕方を、位相軌道の媒介変数表示という。また式より変数  $t$  を消去して次式を得る。

$$mx^2 + \frac{p^2}{k} = C \quad (C \text{ は任意定数})$$

式のような表現の仕方を、位相軌道の媒介変数非表示という。見てわかる通り、 $p-x$  座標において  $C$  が描く曲線は楕円となる。

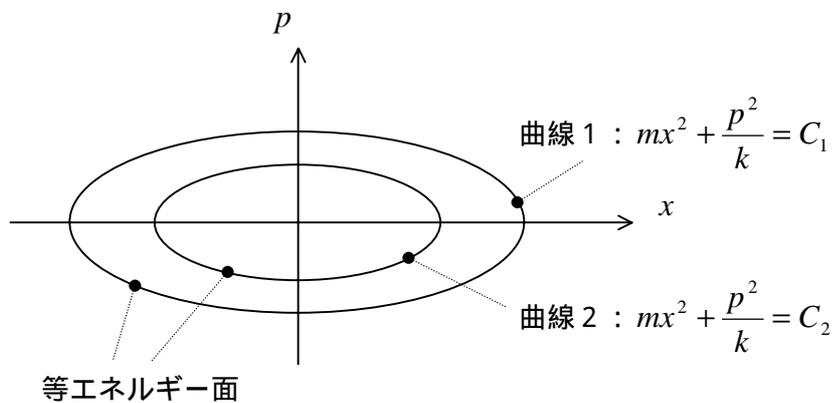


図 11 - 5 . 1 次元調和振動子の位相空間

等エネルギー面

ハミルトニアン  $H$  に関して、一般的に

$$\frac{dH}{dt} = \frac{\partial H}{\partial t} + \sum_{\mu=1}^f \left[ \frac{\partial H}{\partial q_{\mu}} \dot{q}_{\mu} + \frac{\partial H}{\partial p_{\mu}} \dot{p}_{\mu} \right]$$

が成り立つ。(11-1)式によれば右辺第2項の[ ]は消える。したがって

$$\frac{dH}{dt} = \frac{\partial H}{\partial t} \quad (11-2)$$

もし  $H$  が陽に時間  $t$  を含まなければ、エネルギー保存則

$$\frac{dH}{dt} = 0, \quad H = H(\{q_\mu\}, \{p_\mu\}) = \text{Const.} \quad (11-3)$$

を得る。このとき等エネルギー面は、 $2f$ 次元空間内の $(2f-1)$ 次元超曲面となる。また代表点が描く位相軌道も、等エネルギー面上に存在する。

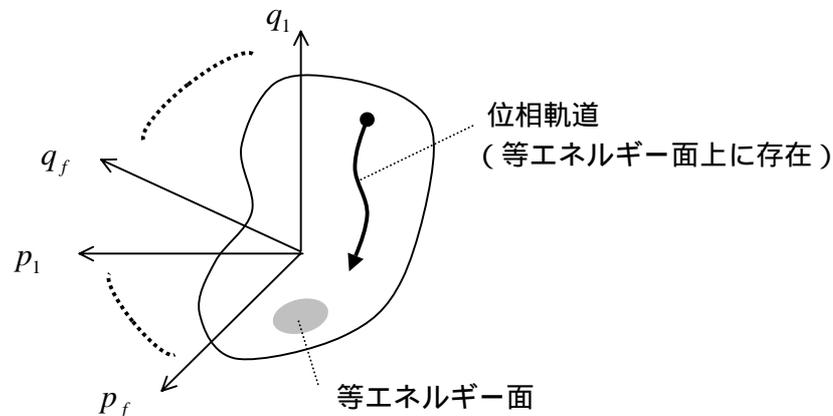


図 11 - 6 . 位相空間内の等エネルギー面

### Liouville の定理

位相空間内の代表点の集合からなる微小体積要素は、時間とともに形を変えるが、体積は不変である。・・・ Liouville の定理

(証明)

統計集団の微小変位の経時変化は、次の行列  $(J_{ij})$  によって特徴づけられる。

$$(J_{ij}) = \begin{pmatrix} \frac{\partial q_1(t+\Delta t)}{\partial q_1(t)} & \cdots & \frac{\partial q_1(t+\Delta t)}{\partial p_f(t)} \\ \vdots & & \vdots \\ \frac{\partial p_f(t+\Delta t)}{\partial q_1(t)} & \cdots & \frac{\partial p_f(t+\Delta t)}{\partial p_f(t)} \end{pmatrix} \quad (11-4)$$

たとえば微小変位ベクトル  $(dq_1(t), 0, \dots, 0)$  の変換式は、上式を用いて

$$\begin{pmatrix} \frac{\partial q_1(t+\Delta t)}{\partial q_1(t)} dq_1(t) \\ \vdots \\ \frac{\partial q_f(t+\Delta t)}{\partial q_1(t)} dq_1(t) \\ \frac{\partial p_1(t+\Delta t)}{\partial q_1(t)} dq_1(t) \\ \vdots \\ \frac{\partial p_f(t+\Delta t)}{\partial q_1(t)} dq_1(t) \end{pmatrix} = (J_{ij}) \begin{pmatrix} dq_1(t) \\ \vdots \\ 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{pmatrix}$$

となる。他の微小変位ベクトルについても同様であり、それらを1つの行列にまとめておく。

$$(dV'_{ij}) = \begin{pmatrix} \frac{\partial q_1(t+\Delta t)}{\partial q_1(t)} dq_1(t) & \dots & \frac{\partial q_1(t+\Delta t)}{\partial p_f(t)} dp_f(t) \\ \vdots & & \vdots \\ \frac{\partial p_f(t+\Delta t)}{\partial q_1(t)} dq_1(t) & \dots & \frac{\partial p_f(t+\Delta t)}{\partial p_f(t)} dp_f(t) \end{pmatrix},$$

$$(dV_{ij}) = \begin{pmatrix} dq_1(t) & 0 & \dots & 0 \\ 0 & \ddots & & \vdots \\ \vdots & & \ddots & 0 \\ 0 & \dots & 0 & dp_f(t) \end{pmatrix} \quad \text{と} \quad \text{おいて} \quad (dV'_{ij}) = (J_{ij})(dV_{ij})$$

の行列式は

$$\det(dV'_{ij}) = \det(J_{ij}) \det(dV_{ij}),$$

ここで  $\det(J_{ij})$  はヤコビの行列式  $J(t+\Delta t, t)$  である。また  $\det(dV_{ij})$  は簡単に展開でき、これを  $d\Gamma_t = dq_1(t) \cdots dp_f(t)$  とおくと、上式は

$$\det(dV'_{ij}) = J(t+\Delta t, t) d\Gamma_t$$

となる。 $d\Gamma_t$  は  $dq_1(t), \dots, dp_f(t)$  で囲まれた領域の体積、すなわち時刻  $t$  における統計集団の微小体積要素を表している。

式左辺の  $\det(dV'_{ij})$  は、時刻  $t+\Delta t$  における変形した微小体積要素

$$d\Gamma_{t+\Delta t} = dq_1(t+\Delta t) \cdots dp_f(t+\Delta t)$$

を表す。よって は

$$d\Gamma_{t+\Delta t} = J(t+\Delta t, t)d\Gamma_t \quad (11-5)$$

となる。  $d\Gamma_t$  の時間不変性は、(11-5) に対して古典力学の法則、すなわち正準方程式を適用することで説明できる。まず位置および運動量について、以下の近似が成り立つと仮定しよう。

$$\begin{aligned} q_\mu(t+\Delta t) &= q_\mu(t) + \dot{q}_\mu(t)\Delta t + o((\Delta t)^2) \quad , \\ p_\mu(t+\Delta t) &= p_\mu(t) + \dot{p}_\mu(t)\Delta t + o((\Delta t)^2) \quad , \text{これより} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \frac{\partial q_\mu(t+\Delta t)}{\partial q_\nu(t)} &= \delta_{\mu\nu} + \frac{\partial \dot{q}_\mu(t)}{\partial q_\nu(t)}\Delta t = \begin{cases} 1 + \frac{\partial \dot{q}_\mu(t)}{\partial q_\mu(t)}\Delta t & (\mu = \nu) \\ 0 + o(\Delta t) & (\mu \neq \nu) \end{cases} \\ \frac{\partial p_\mu(t+\Delta t)}{\partial p_\nu(t)} &= \delta_{\mu\nu} + \frac{\partial \dot{p}_\mu(t)}{\partial p_\nu(t)}\Delta t = \begin{cases} 1 + \frac{\partial \dot{p}_\mu(t)}{\partial p_\mu(t)}\Delta t & (\mu = \nu) \\ 0 + o(\Delta t) & (\mu \neq \nu) \end{cases} \end{aligned}$$

上式を  $J(t+\Delta t, t) = \det(J_{ij})$  に代入して展開すると

$$J(t+\Delta t, t) = \left(1 + \frac{\partial \dot{q}_1(t)}{\partial q_1(t)}\Delta t\right) \cdots \left(1 + \frac{\partial \dot{p}_f(t)}{\partial p_f(t)}\Delta t\right) \quad ,$$

積の結果できる  $\Delta t$  の 2 次以上の項を高位の摂動量とみなして、  $J(t+\Delta t, t)$  は

$$J(t+\Delta t, t) = 1 + \left\{ \frac{\partial \dot{q}_1(t)}{\partial q_1(t)} + \cdots + \frac{\partial \dot{p}_f(t)}{\partial p_f(t)} \right\} \Delta t + o((\Delta t)^2)$$

となる。ここで正準方程式より

$$\frac{\partial \dot{q}_\mu(t)}{\partial q_\mu(t)} + \frac{\partial \dot{p}_\mu(t)}{\partial p_\mu(t)} = \frac{\partial}{\partial q_\mu(t)} \left( \frac{\partial H}{\partial p_\mu(t)} \right) + \frac{\partial}{\partial p_\mu(t)} \left( - \frac{\partial H}{\partial q_\mu(t)} \right) = 0 \quad ,$$

これを に代入して次式を得る。

$$\begin{aligned} J(t+\Delta t, t) &= 1 + o((\Delta t)^2) \quad 1 \quad , \text{ゆえに} \\ d\Gamma_{t+\Delta t} &= J(t+\Delta t, t)d\Gamma_t = d\Gamma_t \quad (11-6) \end{aligned}$$

Liouville の定理は、位相空間内の代表点の集団が、非圧縮性流体のように振舞うことを示している。これは流れ場のなかの油滴の運動に類似する。